

# 分詞構文について—関連性理論の観点から\*

井門 亮

## 1. はじめに

本稿の研究対象である分詞構文については、これまで一般的に、(a) 時、原因・理由、付帯状況、条件、譲歩の5つの意味を表す、(b) 接続詞を用いて書き換えられるが、分詞構文にはそれらの書き換えられたものにはない曖昧さがある<sup>1</sup>、(c) 分詞の意味上の主語が主節の主語と同じ場合は明示されない、そして、(d) 慣用的なものを除けば、話し言葉よりは文章体に多く用いられる<sup>2</sup>、といったことが主に指摘されてきている。

- (1) *Looking down* (= **When** I looked down) *from the plane*, I could see the east coast of the coral island. (時)
- (2) *Being a farmer* (= **As/Since** I am a farmer), I have to get up early. (原因・理由)
- (3) The typhoon hit the city, *causing* (= **and** caused) *great damage*. (付帯状況)
- (4) *Going ahead* (= **If** you go ahead) *for a mile*, you will get to the pier. (条件)
- (5) *Admitting* (= **Though** I admit) *you have a point*, I still think I am right. (譲歩)

(江川 1991:344-345)

本論では、Sperber and Wilson (1986/1995<sup>2</sup>) で提案されている関連性の原理に基づき、現在分詞を用いた分詞構文について<sup>3</sup>、まず、(a) 読み手は分詞構文の意味をどのように解釈するのか、(b) その意味の性質はいかなるものか、(c) 分詞構文の持つ曖昧さは何に起因しているのか、といった3点について考察する。さらに、分詞構文の中でも特に解釈に労力を要すると思われる、主節が後置された分詞構文を取り上げ、Uchida (1998) で提案されている「サスペンス」(suspense) という概念を発展させて分析を行う。また、分詞構文が書き言葉に多い理由についても考察を加える。

## 2. 分詞構文の意味とその性質

### 2.1. 分詞構文の意味の多様性

読み手はどのように分詞構文の意味を解釈し、そして、その意味の性質はいかなる

ものだろうか。まず考えられるのは、読み手は、(1-5) に挙げた5つの意味の中から適当な解釈を選択しているとするものであろう。

しかし、経験上からも分詞構文に出くわしたときに、それら5つの意味の中から適当な意味を選択しているとは考え難い。これは(6-9)のように、複数の意味を表すことのできる分詞構文が存在することからもそのように思われる。

- (6) *Standing on a chair*, John can touch the ceiling. (有村・他 1999:61)
- (7) *Seeing a police officer coming*, the robbers turned their car round and drove off in the opposite direction.
- a. **When** they saw a police officer coming,...
- b. **Because/as** they saw a police officer coming,... (吉田 1995:70)
- (8) *Closing the window*, Harry squeezed his thumb. (temporal overlap: 'when'; causality: 'because'; instrumentality: 'by -ing') (Kortmann 1991:2)
- (9) a. *Writing the final chapter of his thesis*, John happily whistled away. (temporal overlap: 'when, while': causality: 'because')
- b. *Knowing the importance of his evidence*, the witness preferred to stay at home. (causality: 'because'; concessivity: 'although')
- c. *Refusing to appear in court*, the witness documented his fear of giving evidence. (temporal overlap: 'when'; causality: 'because'; instrumentality: 'by/in -ing; thereby') (ibid.)

(6) では「椅子の上に立ったので」という「理由」の意味と、「椅子の上に立てば」という「条件」の意味とに曖昧である。(7) でも「時」と、「理由」の読みが可能である。(8) や (9a-c) でも同様に複数の読みが可能である。

さらに(10-13)のように(1-5)の5つの意味以外を表す場合もある。

- (10) He fired, *wounding one of the bandits*.
- (11) *Using a sharp knife*, he managed to cut the bread.
- (12) "Welcome!", said Mrs. Davidson, *speaking in a voice as soft as her smile*.
- (13) I wrote to her, *suggesting a slightly alternative idea*. (有村・他 1999:61-62)

(10) では、「発砲して」から「盗賊の1人に傷を負わせた」という「時間関係」を、

(11) では、「鋭いナイフを用いて」といった「道具」を示している。また、(12) では、Mrs. Davidson の発話時の「様態」を示し、(13) では、彼女に書いた手紙の内容を「例示」している。以上の例からも、読み手は、分詞構文の意味を (1-5) の 5 つの意味から単に選択をしているのではないことが分かる。

その他にも分詞構文の解釈に関しては、これまで、「分詞構文が、時、原因・理由、付帯状況などのどの意味関係を表すかということは文脈によって決まってくることで、そのいずれであるか常に明確に識別できるとは限らない。」(安井 1982:152 下線筆者)、あるいは「分詞構文と主節の論理関係はきわめて多様で、いわば文脈次第でいかようにも変化し得るという特徴がある。」(有村・他 1999:62 下線筆者) といったように、漠然と述べられるのにとどまっている。

これらの記述では、「文脈」という言葉が使われているが、仮に「文脈」という概念を先行するテキストに限定するならば、(14) のような先行文脈の存在しない場合(物語の冒頭部分)の説明は不可能である。

(14) *Winded and coughing*, I lay on one elbow and spat a mouthful of grass and mud. The horse I'd been riding raised its weight off my ankle, scrambled untidily to its feet and departed at an unfeeling gallop. (D. Francis, *Reflex* [小谷 1992:243])

さらに、「分詞構文の意味関係は、文脈によって決まってくる」とした場合、時間を費やして考えさえすれば、読み手は文脈をいくらでも広げて、いかなる解釈にでもつなげることが可能になってしまうであろう。つまり、文脈から推論するとしても、その推論を制約する何らかの基準が必要となるのである。

本論では、読み手は分詞構文の意味を、(1-5) のような 5 つの中から選択するのではなく、関連性の原理に基づいて推論するという考えを提案し、その妥当性を検証する。

## 2.2. 拡充 (enrichment) について

まず、今後の議論の理論的基盤となる関連性理論について見ていくことにする。関連性理論の枠組みでは、(15a) の「記号化/記号解読」(encoding/decoding) の過程と、(15b) の「推論」の 2 つの過程が言語によるコミュニケーションには含まれる。

(15) *Two processes in linguistic communication:*

a. Encoding/decoding process (linguistic meaning/logical form)

b. Inference process (reference assignment, disambiguation, and enrichment)

つまり、記号化／記号解読による言語的意味（論理形式）のみでは、発話の意味は規定できず、その文の言語的意味に、コンテキストに照らした「指示付与」(reference assignment)、「曖昧性の除去」(disambiguation)、「拡充」(enrichment) といった推論による肉付けの作業が必要なのである<sup>4</sup>。

本論での分析には、これらの推論の過程の中でも、特に (16) に示される拡充という作業が重要となってくる。次の例を見てみよう。

(16) The park is some distance from where I live. (Carston 1988:164)

(16) を記号解読し、“the park” や、“I” に指示付与をした、例えば、「山田太郎の住んでいるところから代々木公園までは、多少とも距離がある」といったものは自明のことであり、関連性はない。(16) の解釈には、例えば (17a, b) のように「代々木公園までは、鈴木花子が思っている以上に、山田太郎が住んでいるところから距離がある」、または、「代々木公園は、山田太郎の家から歩ける距離にはない」といった基準があてがわれてはじめて完全な発話解釈が可能になる。つまり、(16) の発話解釈には記号解読したものに拡充という推論の作業が必要となり、その結果得られた解釈が、関連性を有することになるのである。

(17) a. The park is further away from where I live than you think.

b. The park isn't a walkable distance from my house. (ibid.:165)

Grice (1975) の枠組みでは、こういった拡充の作業により復元されたものは、「推意されたこと」(what is implicated) とされるが<sup>5</sup>、関連性理論では、表意 (explicature) に貢献するもの、つまり、話し手が言おうとしている内容のうち、語用論的に決定される明示的 (explicit) な側面のものであるとしている。なぜなら、これらは発話の言語的意味とは全く異なっている推意 (implicature) とは違い、言語的意味に肉付けをした結果として得られるものだからである。

Sperber and Wilson は、(18) にあるように拡充など表意を復元するための推論に際して、読み手は、関連性の原理 (19) に一致する解釈を選択すると指摘している。

- (18) At every stage in disambiguation, reference assignment and enrichment, the hearer should choose the solution involving the least effort, and should abandon this solution only if it fails to yield an interpretation consistent with the principle of relevance.

(Sperber and Wilson 1986/1995<sup>2</sup>:185)

- (19) (*Communicative*) *Principle of relevance*:

Every act of ostensive communication communicates a presumption of its own optimal relevance. (*ibid.*:158)

つまり、読み手は、より少ない労力でより大きな効果<sup>6</sup>を生むような解釈を選択し、そういった関連性の原理に一致する解釈を見つけたなら、それ以上他の可能性は探さないのである。

### 2.3. 分詞構文の意味と関連性

それでは、これまで概観してきた関連性理論の枠組みでの考察を、分詞構文に当てはめていく。次の例をもう一度見てみよう。

- (7) *Seeing a police officer coming*, the robbers turned their car round and drove off in the opposite direction.
- a. **When** they saw a police officer coming,...
  - b. **Because/as** they saw a police officer coming,...

(7) の文によって記号化されているのは、分詞で表されている「警官が来るのが見えた」ということと、主節で表されている「その泥棒たちは車を方向転換させて反対の方向へ走り去った」ということだけであるが、これらを記号解読しただけでは、この文を完全に解釈したことにはならない。(7) の文を完全に解釈するためには、記号解読されたそれら2つの意味的なつながりを読み手は推論、即ち、拡充しなくてはならない。その結果として、(7a) の「警官が来るのが見えたとき」、または、(7b) の「警官が来るのが見えたので」といった解釈が引き出されることになる。また、読み手は、文脈などからより少ない労力で最初に選んだ関連性の原理に一致するものを、その解釈とするのである<sup>7</sup>。

こういった分詞と主節との意味関係は、発話から得られた言語的意味に肉付けをした結果であり、関連性の原理に基づいた拡充という作業により復元されるものなので、

表意の構築に関与すると考えられる。つまり、分詞構文で書き手が言おうとしている内容のうち、語用論的に決定される明示的な側面なのである。

関連性理論の枠組みでコミュニケーションに関して言われているように<sup>8</sup>、分詞構文にも記号化／記号解読の段階では (1-5) に代表されるようないくつかの言語的に可能な解釈があるかもしれない。しかし、それらすべての可能なものは、その文脈において等しく呼び出しが可能 (accessible) ではない。読み手は関連性の原理に一致する、最初により少ない労力でたどりついたものをその解釈とするのである。

よって、これまで指摘されてきた分詞構文の曖昧さは、記号化／記号解読の段階において、言語的に可能な解釈が複数存在することに起因するものと考えられる。意味論、語用論の区別の観点から捉え直せば、分詞構文は、意味論的には曖昧であるが、語用論的には曖昧ではないと言えるだろう。一方、そういった曖昧さを含んだ分詞構文を、接続詞を用いてパラフレーズした場合は、可能な解釈の幅が狭められ曖昧さは少なくなる<sup>9</sup>。

それでは具体例をいくつか見ていくことにしよう。

(20) Ole Anderson rolled over toward the wall.

“The only thing is,” he said, *talking toward the wall*, “I just can’t make up my mind to go out. I been in here all day.”  
(E. Hemingway, “The Killers”)

(21) a. She drank the neat whisky from the flask and shuddered a little when she swallowed. She handed the flask to Macomber who handed it to Wilson.

b. “What would happen if they heard about it in Nairobi?”

“I’d lost my license for one thing. Other unpleasantnesses,” Wilson said, *taking a drink from the flask*. “I’d be out of business.”

(E. Hemingway, “Happy Life of Francis Macomber”)

読み手は、(20) の1行目から、アンダーソンが壁の方を向いていることが分かる。そこから最初により少ない労力で引き出される “*talking toward the wall*” の解釈は、「アンダーソンは壁に向かって話すように」といったものであろう。(21) でも同様に、先行する文脈 (21a) でウィルソンとマコーマーらがウイスキーを飲みながら会話をしている場面があるので、そういった文脈で (21b) の “*taking a drink from the flask*” は、「ウィルソンは瓶から一飲みして」と解釈されることになる。また、これらの場合は、主節が分詞に先行しているため、表されていない意味上の主語も、主節から少ない労

力で簡単に拡充することができる。

読み手にとって、これらの解釈はより少ない労力で最初に引き出された関連性の原理に一致するものであり、それゆえ、読み手は、さらに文脈を広げてこれら以外の他の解釈を探すことはしないのである。

こういった例を分詞構文を用いなくて、接続詞を用いて単に2文をそのまま重ねると、(22, 23)にも示されるように、同一の主語も2度用いられることになり、繰り返しの感が強くなる。

(22) *Not knowing what to do, she applied to me for advice.*

(= As she did not know what to do, she applied to me for advice.)

(23) *Arriving at the station, he found his train gone.*

(= When he arrived at the station, he found his train gone.) (Zandvoort 1960:34)

最適の関連性を目指す書き手は、読み手が分詞構文の意味関係や、意味上の主語が明示された場合に要する処理労力よりも少ない労力で、それらを拡充することができる と確信しているので、それらを明示しない分詞構文を用いているのである。

この関連性の原理に基づいた分析により、(24)のような容認度の低い例に対しても説明が可能になる。

(24) *Being a teacher of American Literature,*

a. I remembered Whitter's "Massachusetts to Virginia".

b. #I lived near the river.

(早瀬 1992:21)

この例では(24)の“Being a teacher of American Literature”に(24a)または(24b)を続ける訳だが、(24b)の方が容認が困難になるのは、(24a)に比べて、(24b)との意味的なつながりを推論するには労力がかかりすぎ、それに見合った効果が期待できそうにないからであろう。

### 3. 「サスペンス」と主節が後置された分詞構文

前節で分析した分詞構文(20, 21)は、主節が前置されているため、分詞との意味関係や、明示されていない意味上の主語が容易に把握でき、拡充の作業が比較的スムーズにできる例であった。しかし、前出の(6-9)などの例からも明らかなように、主節

が後置された場合、それらが主節にたどりつくまで確定できないようになっており、読み手は拡充により多くの労力を要することが予測される。

- (6) *Standing on a chair*, John can touch the ceiling.
- (7) *Seeing a police officer coming*, the robbers turned their car round and drove off in the opposite direction.
- (8) *Closing the window*, Harry squeezed his thumb.
- (9) a. *Writing the final chapter of his thesis*, John happily whistled away.  
b. *Knowing the importance of his evidence*, the witness preferred to stay at home.  
c. *Refusing to appear in court*, the witness documented his fear of giving evidence.

それではなぜ、書き手は、主節を前置したり、接続詞を用いてパラフレーズして意味関係や意味上の主語を明示した文ではなく、それらを読み手に分かりにくくし、労力をかけるこの種の分詞構文の方を用いるのだろうか。この点も関連性の原理と、それに基づいた「サスペンス」という考えから説明が可能である。

Uchida (1998) では、(25, 26) にあるように、テキストを読んでいるときにスムーズに読み進めない箇所に遭遇したときに感じる状態をサスペンスと呼び、さらに、そのサスペンスという状態は、「曖昧性の除去、指示付与、拡充」といった推論の過程を遅らせることによって引き起こされるとしている。

(25) *Suspense*:

The readers are left in a state of 'suspense' throughout the time in which they cannot identify or specify the 'deviant' relationships in the text. (Uchida 1998:164)

- (26) 'Suspense'... is a phenomenon which is mainly evoked by delaying those processes (disambiguation, reference assignment, and enrichment), which establish the proposition explicitly expressed. (ibid.:176)

また、(27) で指摘されているように、関連性の原理により、読み手をサスペンスの状態にして、処理労力を課すことによって、それに見合うだけの文脈効果を遡及的に高めることが期待できるのである。

- (27) To put the reader in a state of suspense means to increase his or her processing effort.



However, given the presumption of relevance, no unjustifiable effort should be demanded: there should be contextual effects to offset the processing effort though there might be a delay in the availability of these effects... This effect would often be retroactive... i.e. when the readers find the answer and are set free from the state of suspense, they will return to the point where they initially entered suspense and interpret the text again in the light of the newly obtained perspective. (*ibid.*:164)

Uchida (1998) で挙げられている、サスペンスの具体例を見てみよう。

- (28) The professor had two houses, one inside the other. He lived with his wife and child in the outer house, which was comfortable, clean, disorderly, not quite big enough for all his books, her papers, their daughter's bright deciduous treasures. The roof leaked after heavy rains early in the fall before the wood swelled, but a bucket in the attic sufficed. No rain fell upon the inner house, where the professor lived without his wife and child, or so he said jokingly sometimes: 'Here's where I live. My house.'

(U. Le Guin, "The Professor's Houses" [Uchida 1998:163])

これは短編の冒頭部分であるが、この部分から読み手は「家の中にある家とはいったいどんな家なのだろう」という疑問を持ち、思いをめぐらせ、サスペンスの状態のまま読み進めることになる。読み進めるにつれて、もう一つの家はミニチュアの家であると判明して、読み手はなるほど納得し、効果が得られるのである。この例で作者は、与える情報を少なくして、読み手をサスペンスの状態にしているが、ここで遡及的に得られる文脈効果は、この短編を "The professor had a miniature house." とはじめた場合には決して得られないものである<sup>10</sup>。

それでは、主節が後置された分詞構文の具体例をいくつか見ていくことにする。

- (29) *Softly unbolting the door*, he stuck the cat's head round the edge and ejaculated a piercing "Miaow." (A. Christie, "The Adventure of the Cheap Flat")
- (30) "Good night," said the younger waiter.  
"Good night," the other said. *Turning off the electric light* he continued the conversation with himself. (E. Hemingway, "A Clean, Well-lighted Place")

これらの例では、分詞が主節に先行しているため、読み手は、分詞で表されている出来事が、後続する主節とどのようにつながるのだろうか、また、誰がその行為を行ったのだろうかという疑問を持ちながら、サスペンスの状態で読み進めなければならない。つまり、先行する分詞の段階では、主節との意味関係や、文法的に保証された意味上の主語が明らかではないので、読み手は一時的にそれらを仮定して読み進め、そして、主節にたどりついてそれらが確認されたり、修正されたりすることになるのである。例えば (29) では、「ポアロが、ドアのかんぬきをそつとはずすと」、また (30) では、「彼は電灯を消しながら」といったように主節からそれらが確認されて効果もたらされることになる。

次の (31) は段落の最初に分詞が来る場合である。

- (31) *Turning off the main road*, the two men passed into the comparative quiet of a mews. They had been dining together and were now taking a short cut to Hercule Poirot's flat. (A. Christie, "Murder in the Mews")

(31) では、“Turning off the main road” という分詞が段落の初めに来ているので、まず、誰が大通りを曲がったのか、読み手にはこの時点では明らかでない。さらに、主節との意味関係も確かではなく、読み手はサスペンスの状態のまま、先行文脈などから仮の想定をもって読み進めなくてはならない。しかし、主節から「2人が大通りを曲がると」といった解釈が確定し、サスペンスの状態から脱することになる。

こういったサスペンス感、(32, 33) のような長い分詞が文頭に来る場合に、よりはっきりと感じられるであろう。

- (32) *Contending that there was no evidence of danger to human health*, the U.S. insisted that the ban was simply a protectionist ploy for European meat industry.

(Newsweek. January 9, 1989. [小谷 1992:240-241])

- (33) *Calculating that the EC restrictions would cost the U.S. about \$100 million*, the Regan administration announced punitive tariffs beginning New Year's Day on an equal amount of European food stuffs...

(Newsweek. January 9, 1989. [小谷 1992:241])

さらに、非常にまれな例ではあるが、前出の (14) のような先行文脈のない物語の

冒頭の場合でも、同様にサスペンスの状態のまま読み進めなくてはならなくなる。

- (14) *Winded and coughing*, I lay on one elbow and spat a mouthful of grass and mud. The horse I'd been riding raised its weight off my ankle, scrambled untidily to its feet and departed at an unfeeling gallop.

これら主節が後置された分詞構文の場合、労力の観点から見れば、書き手は、主節との意味関係や、意味上の主語を読み手に推論、拡充させるのに余計な労力をかけさせ、サスペンスの状態にしている。しかしながら、読み手は、関連性の原理に基づき、拡充をするのに費やした労力を相殺するだけの効果が得られることが保証されているので、読み進めることができるのである。また、書き手は、読み手をサスペンスの状態にすることによって遡及的に生じる効果を挙げさせるため、このタイプの分詞構文を用いていると考えられる。

一方、主節が前置されたり、接続詞を用いてパラフレーズされた場合、分詞と主節との意味的なつながりや、意味上の主語が容易に把握されるので、読み手はサスペンスの状態になることはないが、それによって生じる効果は期待できないのである。

ここで、これら主節が後置された分詞構文の場合のサスペンスと、Uchida (1998) で指摘されているサスペンスとは、性質が異なっていることに気が付く。Uchida (1998) で指摘されているのは、(28) のように読み手がサスペンスの状態となる期間が比較的長く談話単位であるのに対し、これまで見てきた分詞構文の場合では、その期間が短く1文単位である。よって本論では、談話レベルのサスペンスを *global suspense* と呼び、それに対して、文レベルのサスペンスを *local suspense* と呼び区別することを提案したい<sup>11</sup>。つまり、サスペンスの状態になる期間も、比較的長い場合と、分詞構文の場合のようにかなり短い場合とがあり、程度の問題であるということが言えるのである。

以上のことから分詞構文が書き言葉(小説など)に多い理由の一端が伺える。Uchida (1998) が (34) で指摘しているように、読み手に処理労力を課すことによってサスペンスの状態にし、それに見合った効果を遡及的に挙げさせようとするのは、小説などではよく使われる手法である。

- (34) In literary texts, it is often the case that the author creates suspense through the process of reference assignment or enrichment...If the author is successful in putting

the readers in a state of suspense, he can then create corresponding effects throughout the course of text. (Uchida 1998:164)

つまり、与える情報を少なくして、読み手に考えさせようとする書き手の意図が反映され、その結果、小説などの書き言葉に多くなっているのかもしれない。

#### 4. おわりに

本論ではこれまで分詞構文の様々な側面について、関連性理論の枠組みから検討してきた。分詞構文には、パラフレーズされたものに比べると、記号化/記号解読の段階で言語的に可能な解釈が複数存在するため曖昧さが生じているが、読み手は、関連性の原理に基づき、より少ない労力で最初に浮かんだものをその解釈とし、そして、その解釈は拡充という作業による明示的な側面を持つことが明らかになった。分詞構文の中でも特に主節が後置された場合は、主節が前置されたり、パラフレーズされたものなどに比べ、読み手が拡充の作業をするのに余計な労力がかかり「サスペンス」(local suspense) の状態になるものの、それに見合った効果が期待できるので用いられるのである。また、書き言葉に分詞構文が多いのは、書き手が、与える情報量をわざと少なくして読み手に考えさせようとする小説などでよく使われる手法に基づいているためと考えられる。なお、本論では分詞構文のみに焦点を当てて分析を行ってきたが、こういった関連性理論の枠組みによる分析は、意味論と語用論の区別にも一石を投じるものとなるであろう。

最後に、書き手が、2つの出来事を分詞構文を用いて表そうとするとき、どちらを分詞に、または主節にするか、そしてそれらの位置によって6つの可能性が考えられる訳であるが、実際には分詞が文末に来る場合が多いようである。では、何に基づいて分詞、主節を決定しているのか、また、分詞が文頭や文中に来る場合よりも、文末に来る場合の方が多いのなぜだろうか。これらの点に関しても、読み手の処理労力との関係から説明ができるようにも思えるのだが、詳しくは、今後の研究課題にしたいと思う。

#### 注

\* 本稿は、1999年12月4日に立命館大学において行われた、日本語用論学会第2回大会での口頭発表の内容に加筆・修正を加えたものである。奈良女子大学の内田聖二先生をはじめ、貴重な御助言をいただいた皆様にこの場を借りて心から感謝の意を表したい。もちろん本稿におけ

る不備な点および誤りはすべて筆者の責任である。

- 1 分詞構文の持つ曖昧さについて、小西 (1964:34) では「分詞構文を用いた方は、パラフレーズしたものとは違った未分化の意味をたくさん含んでいるように思われる。このように一見明確さを欠き、暗示的であるところこそ、この分詞構文の特徴があるようだ。」と述べられている。
- 2 赤野・藤本 (1993:11) によると、彼らの収集した分詞構文の 1401 の用例のうち、83.4%にあたる 1168 例が小説である *imaginative prose* から抽出されたものであったと指摘している。
- 3 本論では、独立分詞構文、懸垂分詞構文、また過去分詞を用いた分詞構文などは取り上げない。それらについては稿を改めたい。
- 4 その他の「指示付与」や、「曖昧性の除去」の作業については、Carston (1988) などを参照のこと。また、Matsui (2000) によると、最新の関連性理論の枠組みでは、論理形式と表出命題とのギャップを埋めるための作業として、*disambiguation*, *saturation*, *free enrichment* といった3つの作業を提案しているようであるが、本論では、Sperber and Wilson (1986/1995<sup>2</sup>) や、Carston (1988) に基づいた分析を行う。*Saturation*, *free enrichment* については、Recanati (1993) を参照のこと。
- 5 Grice の枠組みでは、‘what is said’ (言われたこと) は、*linguistic meaning* に *reference assignment* と *disambiguation* を行うことによって得られるとし、それ以外のは、‘what is implicated’ とされる。Carston (1988) では、この Grice の枠組みの問題点が指摘されている。
- 6 文脈効果 (*contextual/cognitive effect*) とは、聞き手が持っている想定を強化したり、放棄したり、文脈的含意が得られた場合のことを言う。
- 7 明示されていない分詞の意味上の主語も、この拡充という作業により、「警官が来るのがその泥棒たちに見えたとき／ので」と復元されることになる。
- 8 関連性理論の枠組みでは、コミュニケーションに関して次の4つの仮定を立てている。
  - a. Every utterance has a variety of possible interpretations all compatible with the information that is linguistically encoded;
  - b. not all these interpretations are equally accessible to the hearer (i.e. equally likely to come to mind) on a given occasion;
  - c. hearers are equipped with a single, very general criterion for evaluating (i.e. accepting or rejecting) interpretations as they occur to them;
  - d. this criterion is powerful enough to exclude all but at most a single interpretation, so that the hearer is entitled to assume that the first acceptable interpretation is the only one. (Wilson 1999:1)
- 9 Blakemore (1988, 1992) や Wilson and Sperber (1993) では、接続詞や談話連結詞などが、解釈の幅を狭める「手続き的意味」を伝えるとしている。
- 10 内田 (1992, 1993) を参照。

11 Uchida (1998) では suspense の他に、global twist / local twist という概念が提案されている。

...we often come across cases in which the stories turn out to be quite the opposite to readers' anticipation, and as a result authors are able to achieve some kind of dramatic effect...I propose calling it a 'twist'. Actually it might be possible to classify this 'twist' into two subtypes: one local and the other global. A local twist concerns a particular utterance or a particular situation: a global twist concerns the development of the story. (Uchida 1998:169)

Suspense に関しても同様に、global と local の 2 種類を提案することによって、twist との平行性を持つことが可能になる。

### 参考文献

- 赤野 一郎. 1992. 「分詞構文の機能と意味」『語法研究と英語教育』14, 30-39. 山口書店.
- 赤野 一郎・藤本 和子. 1993. 「コーパスをいかに活用すべきかー分詞構文を例にー」『京都外国語大学研究論叢』41, 1-15.
- 荒木 一雄・安井 稔. (編) 1992. 『現代英文法辞典』東京: 三省堂.
- 有村 兼彬・北峯 裕士・小林 敏彦・福田 稔・古川 武史. 1999. 『英語学へのファーストステップ: 英語構文論入門』東京: 英宝社.
- Blakemore, D. 1988. *Semantic Constraints on Relevance*. Oxford: Blackwell.
- Blakemore, D. 1992. *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics*. Oxford: Blackwell.
- Carston, R. 1988. "Implicature, Explicature and Truth-theoretic Semantics." In R. Kempson ed. *Mental Representation: The Inference between Language and Reality*, 155-182. Cambridge: Cambridge University Press.
- 江川 泰一郎. 1991. 『英文法解説』東京: 金子書房.
- Grice, H. P. 1975. "Logic and Conversation." In P. Cole and J. L. Morgan eds. *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*, 41-58. New York: Academic Press.
- 早瀬 尚子. 1992. 「分詞構文における Figure / Ground 性についての一考察」*Osaka Literary Review* 31, 10-22.
- 小西 友七. 1964. 『現代英語の文法と背景』東京: 研究社.
- Kortmann, B. 1991. *Free Adjuncts and Absolutes in English: Problems of Control and Interpretation*. London: Routledge.
- 小谷 晋一郎. 1992. 「前位分詞構文」『成田義光教授還暦祝賀論文集』229-244. 東京: 英宝社.
- Matsui, T. 2000. "Reference Assignment and Relevance." 関連性理論研究集会ハンドアウト. 学習院大学言語共同研究所.

- 西山 佑司. 1997. 「関連性理論から見た意味論」『月刊言語』(10月号) 46-51. 東京: 大修館書店.
- 西山 佑司. 1999. 「語用論の基礎概念」西山 佑司・三藤 博・亀山 恵・片桐 恭弘. 『談話と文脈』(岩波講座・言語の科学7) 1-54. 東京: 岩波書店.
- Recanati, F. 1993. *Direct Reference: From Language to Thought*. Oxford: Blackwell.
- Sperber, D. and D. Wilson. 1986/1995<sup>2</sup>. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.
- Stump, G. T. 1985. *The Semantic Variability of Absolute Constructions*. Dordrecht: D. Reidel.
- Thompson, S. A. 1983. "Grammar and Discourse: The English Detached Participial Clause." In F. Klein-Andreu ed. *Discourse Perspectives on Syntax*, 43-65. New York: Academic Press.
- 内田 聖二. 1992. 「テキストとコンテクスト—語用論の射程」安井 泉(編)『グラマー・テキスト・レトリック』111-135. 東京: くろしお出版.
- 内田 聖二. 1993. 「関連性理論とコミュニケーション」『月刊言語』(7月号) 62-65. 東京: 大修館書店.
- Uchida, S. 1998. "Text and Relevance." In R. Carston and S. Uchida eds. *Relevance Theory: Applications and Implications*, 161-178. Amsterdam: John Benjamins.
- Wilson, D. 1999. "Relevance: The Cognitive Principle." *Pragmatic Theory* (PLIN M202) 1998-9. UCL Lecture Notes. University College London.
- Wilson, D. and D. Sperber. 1993. "Linguistic Form and Relevance." *Lingua* 90, 1-25.
- 安井 稔. 1982. 『英文法総覧』東京: 開拓社.
- 吉田 正治. 1995. 『英語教師のための英文法』東京: 研究社.
- Zandvoort, R. W. 1960. *A Handbook of English Grammar*. Tokyo: Maruzen.